

## B-54 もめんメリヤス肌着の寸法安定性について (第2報)

都立立川短大 酒井 豊子  
○下村 弘子

1. 前回、もめんメリヤス地の洗たくによる寸法変化を、コース方向に構造的に最も伸びきった状態に近づこうとする結果であると考えたが、今回は、その主要な原因と考えられる、布地の伸長時の残留伸について検討する。また、伸長状態の編地中の編目の形を観察して、前回仮定した、伸びきった状態の編目の形を確かめる。

2. ①試料および調整・市販のメリヤス肌着5種より、歪の少ないと思われる胴の部分の編地を採取して用いた。30°Cの蒸留水中に24時間、水平に無負荷状態で浸漬、のち網の上にすくい上げてそのまま自然乾燥した。②残留伸の測定・試片の大きさ5×20cmとし、乾燥および湿潤状態で0.1, 0.2, 0.5, 1.0kgの荷重で1分間伸長、初長10cmの標間の長さを除重後60分迄測定した。③編目の観察・試片の大きさ5×15cm、試長10cm、引張速度300mm/minで、乾燥および湿潤状態で伸長、1秒毎に接写撮影を行ない拡大写真により編目の形を観察した。

3. 前回同様、伸びきった構造における伸び(最大伸)を寸法変化の生じ易さの目安と考え、これと残留伸との間により相関を得た。

最大伸相当の伸びを与えた試片のウェールの縮みを写真より測定すると、伸び切った構造について仮定したウェールの縮みとよく一致し、最大伸以下の伸長範囲では編目は彎曲しており、最大伸以上では、編目がウェール方向に重畳している様子が観察された。